The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベルクソンにおける外界についての一考察 : 『意識の直接与件についての試論』から『物質と記憶』第四章にかけて
Author(s)	天野, 恵美理
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2017, 51, p. 37-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71386
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベルクソンにおける外界についての一考察
―『意識の直接与件についての試論』から『物質と記憶』第四章にかけて―

天野　恵美理

キーワード：ベルクソン／外界／知覚／物質／主客

はじめに

ベルクソンの第一主著『意識の直接与件についての試論』（以下DI）[1] においては、我々の意識内部の事象を解明し、こうした事象を純粋な姿で取り出すことが目指されているのであって、外界の事象については主題的に扱われていない。そうして、いくつかの記述を表面的に見るかぎり、DIにおいては、外界に対して持続が否定されているように見える。一方で、第二主著『物質と記憶』（以下MM）[2] の特に四章では、翻ってそれが認められているように見える。本稿においては、著作間のこうした一見した変化は概ね両著作の外界に対する位置取りの違いによるものであり、DIにおいても、我々がその場で立ち会うものであるかぎり、外界に対して持続が容認されていることを示す。したがって本稿は、外界の時間的側面という観点からDIを読み直すものである。その上で、DIからMM四章にかけての実質的な進歩は、客観性の位置づけがずらされたことにあることを示す。

1節では、DIとMMとの記述の相違を確認する。MMにおいては、外界は、我々がその場で立ち会うものとして捉えられており、外界における行程そのものに持続が認められているのに対して、DIにおいては、「私の外」には持続が無く、諸々の「現在」のみしかないとされていることを確認する。「現在」においては、「真の持続」を携えるものである私の意識の一局面と、それと

同時的なものとしてそれに対応する外界の一局面とが認められるのであり、私が進むに連れて、諸々の「現在」、あるいはむしろ諸々の「同時性」が、我々の精神が差し出す補助的な媒体である「等質的時間」において次々に並置されることではじめて、「私の外」の諸事物が保存されるというわけである。諸々の同時性が次々に並置されていくという見方は、同時性に対してそれをいわば外から俯瞰的に見た見方と言えるであろうし、「等質的時間」とはとりもなおさずそうした見方を可能にする媒体である。2節では、私の意識の一局面と外界の一局面とが対応する場である「同時性」について、DIにおいては、その内実をいわば内側から捉える見方も示唆されていることを示す。この場合、外界は、現在において我々がその場で立ち会い感覚するものとして捉えられているのであって、そのかぎりにおいて、外界も持続に与するものとして認められている。3節では、その上で、DIからMMにかけての実質的な進歩は、DIにおいては同時性に対するいわば外からの見方、つまり俯瞰的に捉えられた諸々の同時性のほうに外界の客観性が位置づけられていたのに対して、MMにおいては内からの見方、つまり我々がその場で立ち会い感覚するかぎりでの外界のうちに、客観性が見いだされるようになったことを示す。

1. DIとMMとの記述の相違

DIにおいては、「時計の文字盤上で、振り子の揺れに対応する針の運動を目で辿る」という事例に即して、次のように言われる。「私の外…には、針と振り子のただ一つの位置のみしか決してありえないのであって、というのも、過ぎ去った位置については何一つ残らないからである。私の内部では、意識の諸事象の有機化や相互浸透の過程が進み、それが真の持続をつくる。…さて、しばらくのあいだ、これらの継起的と言われる振動を思考する自我を除き去ってみよう。すると残るものは、振り子のただ一つの振動にすぎず、この振り子のただ一つの位置にすぎないとさえ言えるので、したがって持続は全然無いことになる。…我々の自我の外には、継起なき相互的外在性があ

る。相互的外在性があるというわけは、現在の振動とそれに先行するもはや存在しない振動とのあいだには根本的に区別があるからであり、継起を欠いているというのは、継起とは、過去を記憶して二つの振動あるいはそれをあらわす記号をひとつの補助的空間の内に並置する、意識的な目撃者にとってのみ存在するからである」(80-1)。現在の揺れがあるときには過去の揺れはもはや存在しえないという意味で相互外在的な諸々の揺れの現在、過去や未来との接続もなしにその度ごとに現れては消える諸々の揺れの現在、こうした諸々の現在は、振り子の一つの揺れと我々の意識の一局面との、諸々の「同時性」と言えるであろうが、それらは、そこに立ち会う我々の意識が携える「真の持続」のいわば恩恵を受けるような仕方でのみ保存され、互いに同一的な諸項として、「補助的空間」に次々に並置される。我々がそれらの揺れのために作り上げた想像的な媒体であるこの補助的空間は「等質的時間」と呼ばれるが、等質的時間においては、継起は単に見かけ上のものでしかない。諸々の同時性が継起しているというのは「矛盾」(172) なのである。「我々の外部には持続にかんする何が存在するのか？現在だけであり、あるいはこう言った方がよければ、同時性だけである」(170)。このようなわけで、DIにおいては、外界に対しては持続が認められていないように見える。

それに対してMM四章においては、外界の行程に対してはっきりと持続が認められている。「私の手がAからBへと移るときの行程」について、「この行程が私の意識に対してとる内的な相」、つまりこの行程を前にしての私の意識は、たしかに持続するのであるが――これについてはDIと共通している――、それとは別に、外界におけるAからBへの行程の持続が、「それが私の意識に対してとる内的な相と一致するのであり、これと同様に緊密で分割不可能なのである」と言われる (cf. MM212)。MMにおいては、視覚が捉える外界の行程そのものにも持続が認められ、私の意識の内的持続と外界における行程の持続とのあいだに、一種のアナロジーが認められているのである。

このように、MMにおいては、内的意識と外界とのあいだに一種のアナロ

ジーが認められ、外界の行程にも持続が認められているのに対して、DIにおいてはそうしたことはまったくないように見える。

2. DIにおける外界の時間的側面

2.1「我々の知覚」の内なる外的事物

前節で見てきたように、DIにおいては基本的に、外的事象は、等質的時間という持続を欠いた媒体において並置されると見えるが、しかし、外界についての記述が等質的時間における互いに同一的な諸項としてのそれに終始しているわけではない。「等質的時間において自らに無際限に並置される」という見方を度外視すれば、実際には「振り子の運動はその場で生じている」とされる（cf.82-1）。そうすると、意識と振り子の揺れのひとつとが立ち会っている「その場」が終われば、その揺れはそのまま過ぎ去ってしまうわけであるが、この「その場」を問題とする余地もありそうである。そして実際、DI二章には、「等質的時間」に入れ込められるものとして以外の、外的事象そのものと、意識の一局面との、「その場」における立ち会いを示していると考えられる記述もある。

「例えば、私がこれから滞在することになる町を初めて散歩する場合、私の周囲の諸事物は、その後も存続するべく定められた印象と、不断に変容するであろう印象を同時に私に対して産出する。私は毎日同じ家々を覚知する」（96）。これはつまり、今日の家々も昨日の家々もそこにおいては同一の諸項として並置される「等質的時間」と、外的対象が「私の意識に対してとる内的な相」――こちらは持続し「不断に変容する」――とがあるということであって、ここまでの記述は前節ですでに確認した内容である。問題はその後であって、次のように続けられる。「しかしながら、だいぶ時が経ってから、最初の何年間かに感じた印象を今に引き比べてみると、かつての印象のなかに生じてしまった、説明がつかず、とりわけ言葉に表しようのない、独特な変化に驚くのである。これらの対象は絶えず私によって知覚され、私の精神

のなかに描かれているうちに、とうとう私の意識存在の幾分かを私から借り受けてしまったという気がする。それらの対象は私と同じく生きてきたし、私と同じく年老いたのである。これは単なる錯覚ではない。なぜなら、もし今日の印象が昨日のそれと絶対的に同一であるならば、知覚することと再認すること、見聞することと回想することとのあいだにどんな相違があるだろうか」(96-7)。石井(2001)が注意を促しているように(p. 59)、ここで「単なる錯覚ではない」と言われているのは、外的諸対象そのものが、私の意識的存在の幾分かを私から借り受け、私と同じく生き、年老いた、という事態である。とすると、ここで外的な「対象」と言われているのは、等質的時間における互いに同一的な諸項とも異なり――ここで言われている「対象」はこれら諸項ほど不変ではない――、またこれらが「私の意識に対してとる内的なアスペクト」――こちらは私の意識にまったく内的なものであり不断に変化しているだろう――とも異なる、第三のもの、あるいは石井(2001)の言葉を借りればそれら両者の「いわば中間物のようなもの」(ibid.)であると思われる。そして、こうした借り受けは、これらの「対象」が「私に知覚される」ことで可能になっているとされる。たしかに、家々が与える印象について私が変化に気づくのは「だいぶ時が経ってから」ではあるし、その時ですら、外的諸対象は私の意識的存在を「借り受けて」いるだけある。しかし、フィロネンコ(1994)も述べているように(cf. p.51)、そもそも、私の意識的存在を借り受けることができるためには、外的諸対象そのものに、借り受けのためのいわば素地がなければならないだろう。そして、まさしく、私が事物を知覚するという事実が、こうした素地をなしていると考えられる。「諸事物は、我々の知覚の外で考察されると、持続しているようには見えない」(157)にしても、このようなわけで、我々がそれらを知覚するかぎりでは、それらは持続に与するものとして認められていると言える。

以上を踏まえると、「我々の外部」には持続にかんする何ものも存在せず、「現在だけ、あるいはこう言った方がよければ、同時性だけ」がある、と言われるときの「我々の外部」ないし「私の自我の外部」というのは、私の意

識の内部の不断に変容する持続の外部のみならず、我々の知覚の外部をも含んでいるのだと考えられる。

2.2「実在的時間」の内なる外的事物

ここまで見てきたことから確認されるのは、我々が外的諸事物を考察するとき、「我々の知覚の外で」等質的媒体において考察するか、我々に知覚されるかぎりにおいて考察するか、という二つの観点がありうる、ということである。三章の終わりに近い部分では、さらに進んで、「物質的宇宙」の本質を等質的な媒体とみなす機械論的な考え方の徹底化は不可能であるとされ、上記の二つの観点のうちの後者の観点が拭い去れないものであることが示される（cf. 153-8）。

まずは機械論的な考え方を確認しよう。例えば、いま目の前にあるお茶は冷めているが、少し前には熱かった。この場合、これら二つの事象を等質的媒体に置き入れるとするなら、これらを「互いに等価である」とみなすことになるが、それには「いささか困難が伴うだろう」。というのも、両者のあいだには熱さの違いという「質的区別」があるからである。しかし、「まさに我々の諸感官がこれら諸現象を知覚するのだから、諸現象のあいだの質的差異をそれらが我々におよぼす印象のせいにして、諸感覚の異質性の背後に等質的な物理的宇宙を想定することを妨げるものは何もない」（154）。（これはつまり、先に挙げた家々の事例で言うなら、家々が被る「独特の変化」を「単なる錯覚」とみなすということである。）つまり、熱さなどの質的差異は我々の感官が我々におよぼす印象のせいであって、「物質的宇宙」そのものの本質は「等質的延長」であると主張することに、何の妨げもないということである。この場合、物理的諸現象に関して、第一の現象を第二の現象が引き継ぐという継起を説明するとなると、第二のそれが第一のそれのうちに先駆的に存在していなければならなくなるが、この場合の先駆的存在としては、第一の現象の観念が我々に対して第二の現象の観念を呼び起こすというだけではもちろん不十分であって、「第二の現象そのものが第一の現象の

ただ中に何らかの形で客観的に存在していなければならない」（153, 強調引用者）というように、両者の結びつきを徹底しなければならない。言い換えると、第一のものから第二のものへの関係は、「数学的に定式化された諸法則」（154）のかたちで見いだされるべきであるだろう。幾何学においては、「平面上で円周を描くという同じ運動がこの図形の全ての特質を生み出している」という意味において、「無際限な数の定理が定義のうちに先住している」のであって、これと同様の仕方で、つまり現下の現象のただ中に別の現象が無際限に見いだされるような仕方、現下の現象が別の現象によって無際限に置き換えられるような仕方で、外界も捉えられねばならないというわけである（cf. 153-4）。だからこうした考え方は、継起をあるがままに認めようとはせず、継起のうちでこれから起こることを、現下のものにおいて見いだそうとしているわけで、「継起の諸連関を内属の諸連関へと変形し、持続の作用を取り消す傾向」（157）をもっていると言える。

しかし、ベルクソンは、継起についてのこうした機械論的な考え方の徹底化を、次のような理由でもって不可能であると見做す。「たしかに我々は、諸事物が我々のように持続しないとしても、それでも諸事物のうちには何か不可解な理由が存しているはずで、そのために、諸現象は一挙に展開されることなく相継起するように見えるのだということをまさしく感じている」（ibid.）。これはつまり、「諸事物のうちに存しているはず」の「何か不可解な理由」が、我々の外的知覚において継起を実際に引き起こしているということである。[3)] ここでベルクソンが言っているのは、（「諸現象のあいだの質的差異」ならともかく、）継起の事実については、それを「我々の感官が我々に及ぼす印象のせい」にして拭い去ることはできない、ということである。なぜそのような「何か不可解な理由」を「諸事物のうちに」想定せねばならないのか。そのわけは、機械論が試みるような論理的努力は「同一律」に基づくが、「いかなる論理的努力をもってしても」、同一律――「同一律が主張するのは、思考されているものはそれが思考されているまさにその瞬間（moment）において思考されているということである」（強調引用者）――

を超え出て、継起についての説明を与えることはできない（156）、という端的な不可能性にある。同一律においてはその「瞬間」の前後が考慮されたりその「瞬間」の内部が掘り下げられたりすることはできない。こうした不可能性からベルクソンは、第二の現象そのものが第一の現象のただ中に何らかの形で客観的に存在しているということはありえない、つまり、「実在的時間の継起的諸瞬間は互いに連帯してはいない」（ibid.）と主張する。要するに、いまこの時点で一挙に展開されてはいない外的現象が我々に対して継起的に現れるのを、我々は逐一追いつつ待たねばならない、というこの事実は、いかなる論理的努力をもってしても拭い去ることはできず、こうした不可能性ゆえに、この事実の理由が、外的事物そのものに帰されているのである。「実在的時間の諸瞬間は互いに連帯してはいない」（強調引用者）と言われるのはそのためであって、実在的時間とはつまり、外的事物そのものの時間性のことである。いかなる論理的努力も、「継起の諸連関を内属の諸連関へと変形し、持続の作用を取り消す」ことを完遂することはできない、つまり実在的時間を取り消すことはできないと言われているのである。

「諸事物のうちに存しているはず」の「何か不可解な理由」についてはDIではこれ以上掘り下げられることはない。ともあれ、機械論的な考え方に対する、継起に関する上記の批判は、今度は質ということに焦点をあてて、次のように言い換えることもできるだろう。ベルクソンは結局、我々の感官が知覚において捉える質の外部に物質の本質を見ようとする機械論的な考え方に対して、次のような批判を行っていると言える。すなわち、こうした考え方は、我々の感官が知覚において捉える質を剥奪した「等質的延長」をひとまずは辛うじて考えることはできても、外界の知覚において確認される継起については説明することができず、しかも、この継起は外的事物そのものに由来する実在的な継起であるはずだから、継起を考慮に入れないわけにはいかない。そうして継起を実在的なものとして考慮に入れる以上は、我々の感官を通じてその場で知覚されるかぎりのものとして、したがって質をも携えたものとして、物質的実在を考えざるをえない、ということである。

さて、そこに「継起なき相互的外在性がある」とされる「私の外」が「我々の知覚の外」をも含んでいるということはすでに見たが、以上を踏まえると、「その継起的諸瞬間が互いに連帯してはいない」「実在的時間」へのアクセスが知覚においてなされるのである以上、「私の外」とは、「実在的時間」の外をも含んでいるということが分かる。

そこで、外界の時間的な面についてのベルクソンの考えを整理すると次のようになるだろう。外的事物は、いったん等質的時間という媒体のうちに入れ込められてしまった以上は、我々の意識の持続の恩恵を被ることで継起という見かけを呈するにせよ、この場合には事物それ自体には持続に与るものは何もない。しかし、等質的時間に入れ込められないかぎりは、つまり、感官によって知覚されている「その場」において捉えられるかぎりは、外的事物それ自身は、「何か不可解な理由」ゆえに、持続に関する何かしらを携えた存在、さらに言うなら「実在的時間」に与する存在として、認められるというわけである。我々が諸事物を、「我々の知覚の外で」等質的媒体において考察するか、我々に知覚されるかぎりにおいて考察するか、という二つの観点を我々が持ちうるということについてはすでに見たが、この二つの観点は結局、諸事物を等質的媒体において考察するか、「実在的時間」において考察するか、という区別であったわけである。そして、等質的時間に置き入れられたものとしての外的事物のあり方（見かけの継起）は、外的事物の本来の時間性（実在的時間）に、我々の精神による一種の技巧を施したものであると考えられているのである。要するに、等質的時間における並置と並行して、外界そのものに対しても、我々の知覚において現れるような質的で持続するあり方を認めないことには、つまりは私の意識と外界との一種の時間的なアナロジーを認めないことには、等質的媒体において同時性を認めるということも不可能であるということを、ベルクソンはこの時点で考えていたということである。

2.3 科学における外的事物

さて、科学の営みは、力学にせよ天文学にせよ、諸々の同時性を計測するものと言われる。そこで、以上を踏まえて、科学に関して、具体例をひとつ挙げておこう。

「天文学者が天体の軌跡をあらかじめ描いたり、これを方程式によって表すとき」、「彼はこの天体と他の特定の諸天体とのあいだの一連の位置連関、一連の同時性と合致、一連の数的関係を確立するにとどまっている」（cf. 146）。なお、位置連関のこうした同時性には、それを観察する意識も立ち会っていることはもちろん前提されている（cf. 86）。ここで、天文学者がしている操作は次のようなものとされる。すなわち、十年後にはかれこれの位置連関があり、百年後にはかれこれの一連関があって…、というふうに同時性を刻み続けていって、千年後の何月何日にはかれこれの位置連関がありしたがって月蝕が確認される、という具合である。このとき、「彼は時間に対して、十倍、百倍、千倍の速度で進むよう命じている」のであって、「彼がこうして変化させるのは、意識された間隙の本性のみであり、これらの間隙は仮説からして計算とは関わらない」（146, 強調引用者）から、彼は諸々の同時性さえ正確に捉えていれば、それらのあいだの間隔は好きに処理する権利があるとされる。つまり、この間隙を、十分の一、百分の一、千分の一と縮めていって、月蝕の起こる日を算出することが実際に出来るわけである。

ここでは一見すると天文学者が諸々の同時性や数式にのみ関わっているように思えるが、見落としてはならないのは、同時的関係を確立するためにいかに間隔を縮めていったとしても、それでも間隔それ自体は、何分の一に縮められようとも依然として残っているということである。次のように書かれていることに注目すべきであろう。すなわち、同時性の間隙を、十分の一、百分の一、千分の一と縮めるこうした操作において、天文学者は、「数秒の心理的持続のうちに、天文学的時間の幾年、幾世紀さえも、収めることができる」（ibid., 強調引用者）と言われ、この際、天文学者は「予言したい現象

に想像上で（en imagination）立ち会う」とか、想像においてではあれ、「それを見る」と言われているのである（147）。同時性の間隙は「時間単位」とも呼ばれるが、上のように時間単位を出来るかぎり縮めていった先で、「彼は出来事を実際には見た」。そして彼は、それにもかかわらず、「その後でこれらの時間単位にその心理的本性を回復させて、出来事を未来に押し戻し、それを予言したと言う」とされる（cf. ibid.）。天文学者は天体の軌跡を方程式によって表すのであるし、こうした計算では諸々の同時性のみしか測られていないのであるが、にもかかわらず、それでもやはり、この操作には、「数秒間の心理的持続」においてこの天文学者本人が、想像上であるにしろその出来事に「立ち会う」こと、それを「見る」ということが、つまり、それのいわば「視覚的知覚」――したがってそこには質が見いだされる――が、払拭しえない前提として、伴っているわけである。

天文学者の予言のみならず、諸々の同時性に関わる科学一般、つまりは外界についての科学一般は、諸事物を等質的媒体において考察するという見方と並行して、こうした「視覚的知覚」を、つまりは我々の意識とのアナロジーにおいて外的諸事物を考察するという見方を、前提とせざるをえないと、ベルクソンは考えている。その上で、ここで重要なのは、自然科学は、諸々の同時性のみを計算に介入させて、それらの間隙を計算や科学的説明の中に介入させない、という仕方で、上の二つの見方を「分離している」（164, 172, 173）ということである。こうした分離のおかげで、心理学的な印象が科学的説明に並行的に認められつつも、前者が後者に混入してそれを不純にするのが避けられて、両者それぞれの領分が守られるというわけである。したがって、ベルクソンはここで、我々の意識と外的諸事物とのあいだの、アナロジーと分離の双方を考慮していると言える。[4)]

3. DI から MM への前進

こうして見ると、我々の意識と外界とのあいだのアナロジーを知覚におい

て認めている点については、DIもMMも共通していると、ひとまずは言うことが出来るだろう。

とはいえ、我々の見るところでは両著作のあいだには次のような相違がある。両著作において、それぞれ、外界の客観性が定義されているのであるが、両著作のあいだで、客観性の位置づけが異なっているのである。DIでもMMでも、量的に測られ、計算に適するもの、要するに科学が取り扱う対象が、客観的と呼ばれるものとされていることには変わりはないが、外界を等質的媒体において見るか、知覚において我々の意識とのアナロジーにおいて見るかという二つの見方のうち、DIでは、前者の見方に「客観性」が定位されていたのに対して、MMでは、前者の見方は主客の関係の規定からは姿を消し、後者の見方のうちに客観性のための余地が見いだされていくのである。

まずはDIにおける主客の定義を見ていこう（cf. 61-3）。DIにおいては、「数の観念」に即して、「数の観念における主観的なものと客観的なものとの厳密な割り振り」について、次のように言われている。まず、数については二通りの見方が可能であることが確認される。例えば、1+1+1という加算の操作をしている最中は、「これら諸単位の各々は、私がそれを操作しているかぎりは」、「ひとつの不可分なもの」として我々の精神に全面的に現れている。それらはその都度、我々が現に捉えているところの、この1でしかないのである。ところが、その操作から注意が離れれば、操作の最中には不可分な単位であった1も、二分の一やら三分の一やらの寄せ集めとして、要するに任意の法則に従って解体されることができ、それらによって際限なく置き換えることができる。さらに、加算が完了した後の3という数も、いったん加算が完了したからには、同様に任意の法則に従って際限なく置き換えが可能である。けれども、操作をしているあいだのまさにその場では、そうした置き換えは不可能であって、でないと加算はできないのである。こうして、数の観念における主観的なものとは、諸々の単位のひとつひとつに「精神が次々に注意を向けていく不可分な過程」であり、言い換えると精神がそれに注意を向けているかぎりでの数であり、客観的なものとは、「いったん形成された」

後、精神の注意から離れて、任意の法則に従って無際限に分解可能となったかぎりでの数のことである。そこから、主客の区別について一般的に次のように言われる。「我々は、完全にまた適切に認識されているように見えるものを主観的と呼び、また、たえず増大する多数の新しい印象によって我々が現にそれについて抱いている観念が置き換えられうるような仕方で認識されるものを客観的と呼ぶ」(62)。

さて、2節で見た、継起についての機械論的説明は、現下の現象が「数学的に定式化された諸法則」を通じて、別の現象によって無際限に置き換えられるような仕方で、外界を捉え、「持続の作用を取り消す傾向」をもつものであった。このことを引き合いに出せば明らかなように、等質的媒体とは無際限な分解可能性・置き換え可能性を容れるものであるから、結局、諸事物を等質的媒体において考察するという見方が、「我々が客観的と呼ぶもの」だと言われているのである。では「我々が主観的と呼ぶもの」とは何か。我々が1を加えるという加算の操作をする最中には、他ならぬこの1が私が現に捉えている全てである、という上記の例から分かるように、それは、我々が現に立ち会っていて、そうであるかぎり、私が現に全てを見ているもの、「その場」が終われば過ぎ去ってしまうもの、つまり、いままさに私に映じているかぎりでのその対象である。だから、外界に関して言えば、「我々が主観的と呼ぶもの」とは、我々の知覚の内において、我々の意識とのアナロジーにおいて――つまりは「実在的時間」に与するものとして――外的諸事物を考察するという見方なのである。要するに、数を扱う際の二通りの見方とは、結局、我々の意識の一局面と同時的な外的事物を捉える際の二つの見方と、同じものなのである。さて、「天文学において語られる時間とは数である」(146)と言われる。しからば、上記の主客の区別を天文学者が月蝕を予言する例に適用してみよう。そうすると、天文学者が「数秒間の心理的持続」において立ち会うまさにその出来事が主観的なものの側に、また、方程式において示されるかれこれの日時――彼が人々に伝達できるのはこちらのみである――が客観的なものの側に、割り振られるだろう。このようなわけで、

DIにおいては、外的諸事物に際しての主客の区別とは、外的諸事物を時間において考察するか、等質的媒体において考察するかの区別なのである。

我々は、外的諸事物を等質的媒体において考察するという見方と、我々の意識とのアナロジーにおいて実在的時間において考察するという見方という二つの見方を確認してきたが、MM四章においては、主観性の規定については概ねDIから維持されたまま、そこにいわばもう一捻りが加えられて、前者の見方は主客の関係を規定する議論からは消え、後者の見方のうちに、客観性のための余地が新たに設けられている。例えば、我々の意識が一秒間に赤い光という質的なものを知覚するとき、科学は、この同じ一秒間の赤色光線に、「四百兆の継起的振動」を認める（cf. MM230）。この四百兆の振動は、もちろん量的なものであると言えるし計算に適している。けれども、これら諸振動は、「それらのあいだで量の相違しか示さない」わけではなく、「それ自身の存在をしばしば計算できないほど多数の諸瞬間に分かつ、質そのものではないか」と言われる（cf. MM227）。科学が特定する四百兆の振動の一つ一つは、我々の意識が知覚する赤い光よりもよほど「青ざめて」はいるだろうが、「なお色づいている」（cf. MM228）。そしてこうした色合いにおいては、異質性が希薄であるとされる。要するに、量的に測られ、計算に適するためには、「それらを純粋な量にしてしまう必要はなく」、つまりは質的なものを払拭する必要は必ずしもなく、我々の観点からはそれを実際上等質的とみなせるほどに「異質性を希薄にする」だけで十分とされるのである（cf. MM203）。こうした程度差が、いわば奥行きのような仕方で質そのものの内部に設定されているがゆえにこそ、我々の感覚それ自体が、それが我々に現に見せているところの質、我々にとって「完全にまた適切に認識されているように見えるもの」――要するに我々が主観的と呼ぶもの――とは異なる客観的実在を孕んでいると、我々は信じているというわけである。

DIからMMへの進歩は、このように、我々の意識とのアナロジーにおいて外的諸事物を考察するという見方自体のうちに外界の客観性のための余地を見いだしたことにある。[5] このようなわけで、DIからMMにかけては、外

的知覚に関して、主観性の規定については維持されたままである一方、DIにおける客観性の規定は、MMにおいては姿を消すことになるのである。

［注］

1） H. Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Presses universitaires de France, 2007. DIからの引用箇所は、括弧内に頁数を示した。
2） H. Bergson, *Matière et mémoire*, Presses universitaires de France, 2008. MMからの引用は、括弧内にMMとした後に頁数を示した。
3） 同様の主旨の記述は、DIのp. 90及びp. 81にも見られる。
4） ベルクソンは、第三章の終わりに近い部分で、機械論と並んで、我々の意識状態と外界とのあいだにアナロジーを認める「物活論（hylozoïsme）」をも批判している。彼が力動論を批判するのは、物活論が、「外界と内界のあいだの、また客観的諸現象の継起と意識的事象のあいだの、ある種のアナロジーのみを含意している」（159, 強調引用者）からであろう。つまり、物活論のほうは、今度は、天文学者による予言のような「規則的継起」（161）を説明することができなくなるのである。我々の意識と外界とのアナロジーを否定する見方と、それを肯定する見方という二つの見方について、それらを然るべき仕方で分離しつつ、それら双方を認めるというのが、ベルクソンの考え方であるだろう。
5） MMにおいては、外的事物は「イマージュ」と呼ばれるが、この呼称によって、「あらゆる実在が意識との…アナロジーをもつということ」が「観念論に対して譲歩される」と言われる（cf. MM258）。ドゥルーズ（1966）は、物質が「イマージュ」と同一視されている点に、DIの客観性の規定の発展を見ているが（p. 34）、「イマージュ」という呼称に関して、DIから引き継がれているものとして認めるべきは、客観性の規定ではなくむしろ主観性の規定の方であるだろう。

［参考文献］

Alexis Philonenko, *Bergson ou de la philosophie comme science rigoureuse*, Les Edition de Cerf, 1994.
Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, Presses universitaires de France, 1966
石井敏夫,『ベルクソンの記憶力理論―『物質と記憶』における精神と物質の存在証明』, 理想社, 2001.

（大学院博士後期課程学生）

Résumé

Réflexion sur le monde extérieur chez Bergson : De l'*Essai sur les données immédiates de la conscience* à *Matière et mémoire*

Emiri Amano

Dans son premier livre, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Bergson vise à éclaircir des choses intérieures à notre conscience. Le problème du monde extérieure n'est pas principale. Il nous sembre, à première vue, que Bergson refuse la durée au monde extérieure, alors qu'il la lui confiera dans le dernier chapitre de son livre suivant, *Matière et mémoire*. Nous affirmons, néanmoins contrairement aux apparences, qu'il admet même dans son premier livre une sorte de durée au monde extérieure à condition que les choses extérieures sont perçues par nous. Le progrès effectif de l' *Essai* à *Matière et mémoire* consiste alors dans le changement de perspective de l'objectivité.

Nous constatons, dans la première partie de cet article, l'apparent contraste entre ces deux livres. Même si Bergson confie dans *Matière et mémoire* la durée au monde extérieur, il affirme dans *Essai* qu'en dehors de moi se juxtaposent des simultanéités d'une phase de notre vie consciente et celle du monde extérieur dans un milieu homogène dépourvu de succession. Quand on ainsi affirme dans *Essai*, on adopte un point de vue qui permet de regarder des simultanéités pour ainsi dire d'en haut, de dehors.

Dans la deuxième partie nous montrons qu'il existe même dans *Essai* d'autre point de vue sur la simultanéité, c'est-à-dire que la simultanéité est saisie aussi de l' intérieur. Le monde extérieur est, de ce point de vue, saisi comme perçu par nous « sur place », et en tant que tel il est admis à participer à durer. Quand on dit qu'il existe aucune durée en dehors de nous, ce « en dehors de nous » implique, d'après nous, « en dehors de notre perception » ainsi que « en dehors du temps réel ».

Nous montrons finalement dans la troisième parttie que la différence entre *Essai* et le 4ème chapitre de *Matière et mémoire* consiste dans le décalage de position de l'objectivité, dans ce que l'objectivité se situe dans le temps, non plus dehors du temps.